平成二十五年八月十日発行
皇學館論叢第四十六巻第四号　抜刷

牧水（ぼくすい）の恋（こい）と死（し）
――若山牧水と万葉集――

田中教子

皇學館論叢　第四十六巻第四号
平成二十五年八月十日

牧水の恋と死
――若山牧水と万葉集――

田中教子

□ 要　旨

若山牧水の「死」の表現は、第一歌集から第七歌集に（特に第一歌集～第三歌集まで）頻出しているが、第八歌集以降は、見られなくなる。これと連動するかのように「恋」という言葉にも同様の傾向が伺える。これは、若山牧水の青春期において「死」が詠われ、青春の終りとともに「死」は詠われなくなった、ということを示していると見られる。

初期の牧水の「死」の表現には二種類があるが、実際の「死」については用いられていない。一方で、同時代の歌人、斎藤茂吉や与謝野晶子などは、実際の死の場面で「死」という言葉を初期から用いている。牧水にもっとも多い「死」の表現は「恋死」である。これは万葉集に影響をうけたものであると考えられる。また、牧水には、「海死にぬ」「海死せり」という、本来は死なないものであるはずの自然の「死」もある。こちらは、万葉集巻巻十六・三八五二からの影響と考えられ、万葉集の「寄物陳思」の歌の型に学んだものと見られる。

牧水は、新しい芸術にむすびつく表現スタイルを探求し、万葉集の「死」の表現方法に行き当たり、これを選び取って、それを自らの薬籠の中に入れ、その作歌に応用、実践していたと考えられるのである。

□ キーワード

若山牧水　相聞　万葉集の「死」　寄物陳思

はじめに

これまで若山牧水の作品には、万葉集からの影響はないものと考えられて来た。牧水の弟子である大悟法利雄氏は、牧水自身の書き残したものや言論から初期歌風の成立に万葉集の影響があるとしているものの、精神論に終始している（短歌・一九八三年五月）。結局、牧水本人が万葉集の研究書などをあらわさなかったことからや、斎藤茂吉のように万葉語を多用することもなかったので、具体的にどこが万葉的であるのかということについては、これまで明確にされてこなかった。そこで本考は、初期牧水作品にみえる相聞の「死」の表現に着目し、同様に死の表現を少なからず内包する万葉集の歌の影響を探る試みをしようとするものである。

（一）若山牧水の「死」の表現

若山牧水の初期の作品中には、少なからぬ「死」の表現がみえる。そこで、まず「死」に注目してみてゆくと、第一歌集『海の声』から第十五歌集『黒松』に合計二一一例の「死」の表現が見られる。そのうち第一歌集『海の声』に三十二例、第二歌集『独り歌へる』に三十四例、そしてその二つを合わせて再編集した第三歌集『別離』には六十二例が見られる。[注1] この頃が牧水の生涯で最も多くの「死」が詠まれた時期であり、歌集の内容としては、恋人・園田小枝子との恋愛がテーマとされている。その後、恋に破れた時期の第四歌集『路上』、啄木の臨終に立ち会った第五歌集『芸術か死か』などにそれぞれ多くの死の表現が見えるが、第八歌集の「砂丘」以後、急激に「死」という

言葉が見られなくなっている。次の表は「死」の用例（歌数）の推移の様子をあらわすものである。

右の表によって明らかなように、死の用例数（歌数）において一つの画期をなすのは、「砂丘」である。この歌集は大正四年、牧水三十一歳の頃の出版である。

まずこの時期は牧水の生活において如何なる時代であったかに触れると、牧水は大正元年二十八歳の時生涯の伴侶となる喜志子と出会い、結婚したが、この当時は喜志子の病また歌誌「創作」（第二期）の失敗という不幸に襲われた時代であった。当然、こうした実生活上の苦しみとかかわるようにもみえるが、そう簡単にいえないのは、以後、「死」の表現がほとんどなくなるからである。この年以後の変化にはもっと違った理由があるとみなければならない。

そこで、全ての歌集における「死」の表現を考えてみると、実際の死に直面しない表現から、実際の死に直面しての表現まで、一様ではないと推測されるが、初期の作品からみられる「死」の表現は彼の特徴的な表現として理解してよいものであろう。すくなくとも、牧水の初期の歌集にみえる、「死」の表現は、主に、所謂「恋死」であった。これは、先の実生活とかかわらせていえば、青春の喪失を暗示するといえる。つまり若者的、情熱的な恋の表現の喪失とでもいえようか。

では、こうしたことは同時代の他の歌人にもみられるものであろうか。確かめておきたい。

同時代の歌人といえば、「死にたまふ母」などに代表される死の表現をなした斎藤茂吉が思い浮かぶが、彼の死の

歌集タイトル	死	恋	発行年月日
海の声	32	43	明治41年７月18日
独り歌へる	34	51	明治43年１月１日
別離	62	74	明治43年４月10日
路上	24	10	明治44年９月12日
芸術か死か	28	10	大正元年９月23日
みなかみ	14	3	大正２年９月10日
秋風の歌	12	5	大正３年４月13日
砂丘	1	5	大正４年10月15日
朝の歌	0	0	大正５年６月22日
白梅集	0	1	大正６年８月５日
さびしき樹木	0	0	大正７年７月23日
渓谷集	0	1	大正７年５月５日
くろ土	3	0	大正10年３月22日
山桜の歌	1	3	大正12年５月17日
黒松	0	0	昭和13年９月13日
（合　計）	211	206	

表現は、

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる　『赤光』

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は死にたまふなり

など、実際の死の場面に「死」という言葉が使われている。また、与謝野晶子は、同時代の歌人のなかでもとくに恋の歌が多い作者である。そうして、明治三十八年に出版された第四歌集にあたる合同歌集『恋衣』に「死」という言葉が十二例見えるなかに、晶子の二例の「恋死」の表現[注2]が含まれるが、この他の初期の恋の歌には「死」はほとんど詠われていないともいえる。『恋衣』には有名な「君死にたまふことなかれ」が含まれており、そのなかに「死」という言葉が見えていることにも注目される。「君死にたまふことなかれ」は日露戦争の折に、晶子が弟の身を思って作ったものである。そしてまた、その後の晶子の作を見ても、「恋死」の歌があるにしても、やはり実際の「死」についてもちいられつづけている。さらにいえば、合同歌集には他に、山川登美子の作中の「恋死」の例二例もある。登美子は若くして父や夫と死に別れ、自らも病弱で夭逝する運命にあった。その作中に散見する「死」の歌は、

わかき身の幸うすき世を歎きしかものこそ無けれ死の大前に　『明星』明治三十九年一月　午歳第一号

われ招く死のすがたか黒谷の鐘なる暮の山出づる雲　『明星』明治四十年二月未歳第二号

死の御手へいとやすらかに身を捧ぐ心うるほし涙わく時　『明星』明治四十一年五月申歳五号

など、主に自らの生命への不安を詠んだものであり、これは辞世に近い種類の歌といえるようである。

このようにみてくると、牧水の初期作品における死の表現には「恋死」という特徴的用法があるといってよいのではないか。

では、その「恋死」の表現は彼独自の発想によってなされたものだろうか。こうした問いを発するのは、『万葉集』

を学ぶ者には次のようなことが思い浮かぶからである。すなわち、万葉集では、挽歌の実際の「死」を意味する場面においては「死」という言葉はほぼ用いられず、大多数が恋の歌に用いられているという特徴がある。[注3] 青木生子氏は、『万葉挽歌論』のなかで万葉集の「全体九三例の中、相聞が圧倒的多数を占めていることは明瞭で、雑歌も若干を除いて相聞的性格の濃いもの、また武立てのない歌における半数の六例も巻十五の中臣宅守・狭野弟上娘子の贈答中にあるものである」と言っている。[注4] 若山牧水はこのような万葉集の「死」の表現に学んでいるとみてよいのではないだろうか。

以下、『万葉集』を視野にいれながら、牧水の「死」の表現の特異性に着目して、第一歌集『海の声』を中心に見てゆきたい。

（二）初期作品の「死」の表現

第一歌集『海の声』の「死」三十二例は、二種類に分けられる。ひとつは所謂「恋死」であり、もう一つは「現実には死なない自然物の死の表現」である。ここで、まず「恋死」から取り上げてみよう。まず、第一歌集『海の声』の「恋死」の表現からみると、

①君来ずばこがれてこよひわれ死なむ明日は明後日は誰知らむ日ぞ

②泣きながら死にて去にけりおん胸に顔うづめつつ怨みゐし子は

③ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひなから死せ果てよいま

④秋立ちぬわれを泣かせて泣き死なす石とつれなき人恋しけれ

⑤遠山の峯の上にきゆるゆく春の落日のごと恋ひ死にも得ば
⑥笛ふけば世は一いろにわが胸のかなしみに染む死なむともよし
⑦おもひ倦じふと死を念ふ安心になみだ晴れたる虚の瞳よ
⑧淋しくば悲しき歌を見せよとは死ねとやわれにやよつれな人
⑨かりそめに病めばただちに死をおもふはかなごこちのうれしき夕べ
⑩吹き鳴らせ白銀の笛春ぐもる空裂けむまで君死なむまで
⑪君笑むかああやごとなし君がまへに恋ひ狂ふ子の狂ひ死ぬ見て
⑫ひたぶるに木枯すさぶ斯る夜を思ひ死なむずわが愚鈍見よ
⑬されど悲し斯く恋ひ狂ひやがて徒だ安らに君が胸に死てむ日
⑭毒の香君に焚かせてもろともに死なばや春のかなしき夕べ
⑮胸せまるあな胸せまる君いかにともに死なずや何を驚く
⑯こよひまた死ぬべきわれかぬれ髪のかげなる眸の満干る海に
⑰あめつちに乾びて一つわが唇も死して動かず君見ぬ十日
⑱君よなどさは愁れたげの瞳して我がひとみ見ろわれに死ねとや
⑲『君よ君よわれ若し死なばいづくにか君は行くらむ』手をとりていふ

ここには三二例中の一九例を「死」の歌をあげたが、これらに万葉集とのかかわりで簡単な説明を加えると、①は、「こがれてこよひわれ死なむ」と言っていることから「恋死」であることがわかる。②は、「おん胸に顔をうづめつつ怨み」と言ってる。③は、すこし、わかりにくい。だが、これは実際の死を詠んでいるわけではなく、接吻により目

眩のような感覚を覚えたことを「鳥翔ひながら」とあらわして、「死に果てよ」と鳥に命令しているものと受け取れる。「鳥翔」という表記は万葉集巻二・一四五「鳥翔成 有我欲比管 見良目杼母 人社不知 松者知良武」という山上憶良の歌の表記からの影響と考えられる。④は、「つれなき人」のために泣き死ぬということで、恋死である。⑤は「恋ひ死」という言葉がはっきりと使われている。⑥この歌の「わが胸のかなしみ」は恋の感情をさしていると見られ、笛の音によって世界中が恋の色一色になったので、もはや「死なむともよし」という感慨になっているものと見られる。⑦「おもひ倦じ」は恋に思い倦じたのであろう。⑧「つれな人」の仕打ちをせめている。⑨には「四首病床にて」という注記がつけられているが、「かりそめに病む」は、重病ではないというほどの意味であろう。実際には死ぬほどではないのであるが、心ひそかに、はかなく死ぬことなどを想像するとれしいということであろう。それは、仮に自分が死ねば、いつもつれない態度の恋人が自分を思い泣いてくれるかもしれない、と思われ、逢うことを前提に死を想像しつついる。恋人がすこしでも自分を思ってくれれば嬉しいということであろう。

⑩は、先にも出ていた「笛」であるが、ここでは空裂けむまでの大音響、また笛の音で相手を殺すまで吹き続けると言う。これは、勇ましい戦陣の笛などが念頭におかれているものと考えられる。こうした笛の表現は、万葉集巻二・一九九番歌、高市皇子挽歌に「鼓の音は 雷の 声と聞くまで 吹きなせる 小角の音も[一云 笛の音は]敵見たる虎か吼ゆると 諸人の おびゆるまでに」に影響を受けたものとも考えられる。⑪は「恋狂ひ死ぬ」という。⑫の「思ひ死ぬ」とは、恋人を思いすぎて死ぬという意味であろう。⑬には「恋ひ狂ひ」とあり、⑭は心中を願う内容の歌である。⑮のように相手の死を願うのは、自分のものにならないのなら、いっそ死んでくれと相手の死をねがうものであるが、これは万葉集巻十一・二三五五「愛しと我が思ふ妹は早も死なぬか生けりとも我れに寄るべしと人の言はなくに」などに見える発想に同じである。⑯「こよひまた死ぬべきわれか」は、現実の死ではなく、恋の為にいくども

心が死んだというのであろう。⑰は、十日君を見ないので「わが唇も死」したのである。⑱は、君の愁いを含んだ瞳に死にそうなのである。⑲の鉤括弧のなかは、恋人のセリフであろう。甘い語らいである。

この第一歌集『海の声』は、明治四十一年七月十八日に生命社より発行されている。園田小枝子との恋愛の絶頂期の作であった。同年の四月十四日鹿児島の鈴木財蔵宛の書簡のなかで「女」（園田小枝子）に手紙を書いたものの出さずに破ったこと、そのなかに、なかなかいい歌があったこと、また、「要するに恋しいのだ」などと書いている。この書簡に記されている十首の最後に①があり、小枝子を思い詠んだ歌であることがわかる。また、この『海の声』の巻末の歌、

恋人よわれらはさびし青ぞらのもとに涯なう野の燃ゆるさま

や第二歌集『独り歌へる』の巻頭、

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや

が見えている。「このさびしさに君は耐ふるや」は、牧水の代表作の一つである。一見して、人間存在の寂しさ、もしくは、青春時代に抱きがちな「さびしさ」を詠んでいるかとも取れがちである。しかし、「君」は、「友」のことではなく、恋人園田小枝子への恋の心情だったのである。

このように『海の声』においては数多くの「恋」が詠われ、そのなかで「死」が表現されているが、牧水は恋に憧れ、恋に苦しみ、恋の歌を詠みながら、同時に万葉集を読んでいたことは、明治四十二年二月五日の石井貞宛書簡[注5]や、千勝義重の『類題万葉短歌全集』（一九〇四年、大学館）をよく読んだと言っていることなどから伺い知れる。

牧水のあまたある「恋死」の表現は、いくつかにグループ分けすることが可能とみられるが、たとえば万葉集の「恋死」の種類は、

（イ）恋しさのあまり死んでしまいそうである
（ロ）恋いこがれているより死んだほうがましである
（ハ）死ぬ思いだが、逢おうため死なない
（ニ）死んでも恋心をあらわさない

という四つの分類がなされている（青木生子『万葉挽歌論』）。仮に、これと牧水の表現とを比べれば、まず（ニ）は、牧水にはひとつも存在しないことがいえる。なぜなら、万葉集時代は通い婚であり、恋人の素性をある段階までは人に知られてはならないものとされていた。しかし牧水の時代になると、不倫以外ではそのような発想はまずない。園田小枝子と牧水の関係は、小枝子に夫のいたことから、実際には不倫にあたるが、当の牧水はそのような事情を知らなかった。牧水は、小枝子の愁いや陰のあることを不思議に思いつつ、そこに惹かれていたのであろう。

では、『万葉挽歌論』の分類の（イ）はどうであろうか。万葉集のこれに相当する歌には、

㋑夢にだに見えばこそあらめかくばかり見えずしあるは恋ひて死ねとか　（四・七四九）
㋺恋ひしなば恋ひも死ねとや玉桙の道行く人の言も告げなく　（十一・二三七〇）
㋩恋ひ死なば恋ひも死ねとか我妹子が我家の門を過ぎて行くらむ　（十一・二四〇一）
㋥恋ひ死なば恋ひも死ねとや霍公鳥物思ふ時に来鳴き響むる　（十五・三七八〇）

など、「死ねと言うのか・・・」と相手に訴える型がこの中にあるとみられる。これは牧水の⑧⑪⑱などと同じ発想の歌である。この他、「思ひ乱れて死ぬべきものを（十一・二七六五）」、「恋の奴に我れは死ぬべし（十二・二九〇七）」、「君を離れて恋に死ぬべし（十五・三五七八）」など、相手に逢えなくて、あるいは、恋の思いの激しさ為に死にそうなことを訴える型も、牧水の「恋死」を歌った①②③⑤⑫⑯⑰などの中心をなす心情と共通するといえるだろう。

（ロ）には、

㋭今は我は死なむよ我妹逢はずして思ひわたれば安けくもなし　（十二・二八六九）

㋬よしゑやし死なむよ我妹生けりともかくのみこそ我が恋ひわたりなめ　（十三・三二九八）

といった歌が属するが、この恋いこがれているよりは死んだ方がましだという発想は牧水の⑬にもみえる。（ハ）には、

㋟妹がため命残せり刈り薦の思ひ乱れて死ぬべきものを　（十一・二七六四）

などの歌が考えられるが、牧水の⑨なども、かりそめに死を考えながら一方で恋人に逢う為に生きるという歌であると見えるから、これの類想歌といえる。この他、青木氏の分類から外れるが、

㋡剣大刀諸刃の利きに足踏みて死なば死なむよ君によりては　（十一・二四九八）

のように「あなたへの恋の為に死んでもいい」というのは、牧水の⑥にも見える発想である。

しかし、牧水の歌には今見たように万葉集の歌の影響を認められる歌もあるものの、⑭⑮のように相手の死を願う歌のように、それを少し外れた歌もある。こうした歌は、牧水の初期作にみえる浪漫的な要素とのかかわりで理解すべきものであろう。彼は男女の心中に憧れを持っていたふしがあるとみられる。それは明治四十年二月一日の鈴木財蔵にあてた書簡のなかに、

君、僕の友人に、女と、もに砒素を分け持ちて、女の二十五歳に達するのを待つてゐるものがある、二十五歳は自由結婚の許さるゝ年齢だ、その間の消息は解つてるだらう。また一人は、ロストに狂ひ泣ひて居るのがある、客観してると頗る面白いよ、しかもみな生命を捧げての真実のラブなんだから非常に荘厳な美を有つて居る、上摺つたものではない。実際若い者の経となり緯となつて居るものは、どうしても恋だね、恋！恋！面白い道具だ。

という一文が見える。ここで牧水は、作歌道具としての「恋」の意識と、心中への憧れを吐露している。こうした意識が、⑭⑮にみえる「もろともに死にたい」という表現を生み出した発想の背景にあるものと考える。

この二首を含めて、牧水の「恋死」を歌う十九首のモチーフは、実際の心情と無縁ではないにしても、万葉集の相聞を読むことによって手に入れた恋歌を詠む場合のひとつの表現方法でもあったといえよう。改めていえば、ここに牧水の万葉集からの影響を認めることができると考えるのである。当時、アララギなどを中心に万葉集から影響を受けた歌人は少なくなかったが、牧水は万葉集の浪漫的な側面に強く影響されていたのである。

（三）「海死にぬ」の表現

第一歌集『海の声』の「死」の表現のもうひとつの特徴は、先に触れた「海」や「風」、「地」、「葉」など、本来、「死ぬ」と表現されない自然について「死ぬ」と表現していることである。これらの歌は、恋の歌の間に挟むように配列され効果を上げている。第一歌集『海の声』のなかにみえる自然の「死」を詠んだ歌は、

1真昼時青海死にぬ巌かげにちさき貝あり妻をあさり行く
2海死せりいづくともなき遠き音の空にうごきて更けし春の日
3いと幽けく濃青の白日の高ぞらに鳶啼くきこゆ死にゆくか地
4わくら葉か青きが落ちぬ水無月の死しぬる白昼の高樫の樹ゆ
5水無月や日は空に死し干乾びし朱泥のほのほ阿蘇静に燃ゆ
6帆柱ぞ寂然としてそらをさす風死せし白昼の海の青さよ

7落日のひかり海去り帆をも去りぬ死せしか風はまた眉に来ず
8秋の海阿蘇の火見ゆと旅人は帆かげにつどふ浪死せる夜を
9疑ひの野火しめじめと胸を這ふ風死せし夜を消えみ消えずみ

である。右のように、海の死（2首）・風の死（3首）・地の死（1首）・葉の死（1首）・日の死（1首）・浪の死（1首）が歌われる。このうち1、2は海の死を歌うが、「海が死ぬ」と表現した歌は先例がないわけではない。すなわち、万葉集巻十六の旋頭歌には類似表現がみえる。それは、

鯨魚取り海や死にする山や死にする死ぬれこそ海は潮干て山は枯れすれ　（十六・三八五二）

という歌である。この万葉集十六・三八五二番歌は、仏教歌の配列になかにおかれており、その意味は「（いさなとり）海は死ぬだろうか、山は死ぬだろうか。死ぬからこそ、海は潮が干て、山は枯れるのだ」（新日本古典文学大系現代語訳）である。初句の「鯨魚取り（いさなとり）」は、「海」にかかる枕詞であり集中に十二例がみえる。「死にする」は、この文脈では「死ぬのか」という疑問のなげかけたかたちになっている。下の句に、干潮になることをもって海は死に、冬枯れることをもって山は死ぬと、答えが示される。からの影響と考えられる。

この万葉集の「海死す」という発想は、佐竹昭広によって、正倉院文書で奈良時代に伝来が確認できる「仏説無常経」（『大正新脩大蔵経』巻第十七、七四五頁中）に、

たとひ妙高山も劫尽くれば皆散壊す。大海深くして底なきも、亦復皆枯渇す。

とみえる部分の発想に近いという指摘（「日本語論」『岩波講座』日本通史一　一九九三年　岩波書店）がなされており、三八五二番歌は仏教的無常観を詠んだ歌としてうけとめられている。

万葉集に見える「海死す」という極めて特殊な発想に類似する牧水の表現は「芸術か死か」「みなかみ」などにも

くりかえし使用されている。また、さきの「真昼時青海死にぬ」（海の声・別離）の歌は、初句に「真昼時」とあり、本来ならもっとも明るく活動的なはずの時間帯である。その真昼に死が訪れるといえば、夕方や夜よりもなお意外である。つづく「青海死にぬ」という句により、広大なひとつの世界が終ったような、ただならぬ緊迫感が漂う。しかしこれは、万葉集の三八五二番歌と同じく、干潮をもって「海死にぬ」と言ったものと考えられ、ここには、その影響をみとめてもよいのではないかと考える。干潮の海の岩陰に小さな貝が動いているのを「妻をあさり行く」と詠んだ。そうした場所で生命活動としての求愛をしようとする貝は、ほかならぬ牧水自身の投影であり、それによって彼の生命活動への強い希求を表現するものにしようとしたと解しえるのではあるまいか。ここでの「妻あさり」は違和感のある表現だが、それが逆に強い印象をあたえるのである。

そこで注目されるのは、この「あさり」である。「あさり」という語は、万葉集に「求食」（五七五・三〇九一）の字であらわされ、語義的には元来は、捕食を意味していたものと考えられる。牧水の歌の場合の「妻をあさり行く」というのは、元の意味からすこしずれているようにも思われるが、探しもとめる意の、やや俗な局面に、この言い方をすることがある。現に第六歌集『みなかみ』の自序に「いろいろな好い酒と料理とをあさることを子供のやうな彼がどんなに楽しんでゐたであらう。」と亡父のことを語った一節に同様の「あさり」の使用がみえる。

牧水の「妻をあさりゆく」心理とは、彼自身が妻（恋人・園田小枝子）を海辺の真昼の時間に探しもとめていることをいうのであろう。実は、これにも万葉集からの影響が見える。万葉集の「あさり」の歌を見ると、

①春の野にあさる雉の妻恋ひにおのがあたりを人に知れつつ　（八・一四四六）

②夕なぎにあさりする鶴潮満てば沖波高み己妻呼ばふ　（七・一一六五）

③あさりすと礒に棲む鶴明けされば浜風寒み己妻呼ぶも　（七・一一九八）

④鴨すらもおのが妻どちあさりして後るる間に恋ふといふものを　（十二・三〇九一）

と、あさりをする動物たちは、皆、あさりしながら同時に妻を求め鳴いていることがわかる。牧水の貝が妻をあさるという歌の場合と類似している。万葉集のこれらの動物があさりする歌は、万葉集の相聞の下位分類「寄物陳思」のかたちである。それは巻十二・三〇九一が寄物陳思の配列におかれていることからもわかる。「寄物陳思」は、物に寄せて思いを陳べる歌。正述心緒と同様、人麻呂の考案らしい。上句で景物を叙し、下句で心情を述べる歌が多い。

（『新潮日本古典集成万葉集』頭注）

と説かれる。譬喩歌と極めて近い場合もあるが、こうした形式について鈴木日出男氏は、

それは、事物現象を表す言葉と心情を表す言葉がたがいに対応しあうことによって、歌中の〈心〉〈物〉いずれの言葉をも越えて新たなイメージを構築しうるというしくみである。

と言っている。(注6) 牧水は、万葉集の寄物陳思の形に目をとめ、その形を学んだと見られる。ただ万葉集と違い、あさりする動物は鳥ではなく貝であるところに注目される。これは、おそらくは岩陰を実体験としてみた景、「岩陰をじりじりと動いていた貝」の様子、を取り込んだ表現とみることができよう。また、万葉集に「己が妻呼ぶ」と詠まれた鳥たちとても同じことであるが、妻を求めていたのは、作者自身と解せられる。作者はあさりする動物たちに自らの心情を投影して詠っているのである。牧水の歌は、近代的リアリズムの表現方法にしたがって、眼前の景を詠み、そこに己の心理を投影した歌となっているのである。

当時の新派の歌人のなかに、万葉集の「寄物陳思」が好まれた傾向が見られるが、それは、斎藤茂吉が、

一首の声調のうへから、赤茄子と云たのであつただらう。（中略）かういふ種類の歌は古くは、『物に寄する歌』と云つた。

（「作歌四十年」）

と言っているところからもわかる。この茂吉の「作歌四十年」の文は、「赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき歩みなりけり」という歌にたいする自注の部分であるが、ここで、茂吉は赤茄子の歌を「物に寄する歌」、つまり、寄物陳思であるとはっきり言っている。茂吉と牧水は共通の友人などを介して交流があり、互いの作品にたいして非常に意識しあっていた。そうした点から、牧水もまた、寄物陳思に注目していたことが考えられる。

もう少しこのことを考えるために、次に、『海の声』の海以外の自然の「死」を見てゆこう。

いと幽けく濃青の白日の高ぞらに鳶啼くきこゆ死にゆくか地

これは、「地」の死である。万葉集では「海」にたいして「山」の死が詠まれていたが、牧水は「海」にたいして「地」である。ここに牧水の単に『万葉集』の表現に捉われず、それらを自らの表現に取りこんでいきたいという意欲を読み取ることができる。「死にゆく地」とは、大地、土地、陸地の死であり、静かな状態をあらわしているものと考えられる。

わくら葉か青きが落ちぬ水無月の死ぬる白昼の高樫の樹ゆ

この「水無月の死ぬる白昼」の「死」は、高樫から落ちた「わくら葉」のことであろう。青い葉が落ちるという異変を描いているのであるが、万葉集巻二・一三一の人麻呂の「夏草の思ひ萎えて」という歌句も同じように心と響き合う異変であると言える。恋の為の苦しみからくる感覚であろう。

水無月や日は空に死し干乾びし朱泥のほのほ阿蘇静に燃ゆ

この「日は空に死し」は、阿蘇山の噴火の煙で太陽が隠れている状態をいうのであろう。

帆柱ぞ寂然としてそらをさす風死せし白昼の海の青さよ

落日のひかり海去り帆をも去りぬ死せしか風はまた眉に来ず

疑ひの野火しめじめと胸を這ふ風死せし夜を消えみ消えずみ

これらは、「風」の死を詠んでいる。風がなくなった状態を「風死す」としているのであろう。「風死す」は季語でもあり、盛夏の候に途絶える風のことであるとされている。

秋の海阿蘇の火見ゆと旅人は帆かげにつどふ浪死せる夜を

この歌の「浪死せる」は、浪のなくなった静かな状態をいうものであろう。海の死の表現の派生形として受け止められる。

また、『海の声』のその他の「死」の表現をみてゆくと、

地のうへに生けるものみな死にはてよわれただ一人日を仰ぎ見む

死ぬ死なぬおもひ迫る日われと身にはじめて知りしわが命かな

『遣るも行かじ死海ならではよし行くも沈みて燃えむ』ねたみの炎

の三首があるが、いずれも実際の死を詠んでいるわけではない。「地のうへに生けるものみな死にはてよ」は、人類の死を望んでいるようないいまわしであるが、破壊的な感情のなかに、己ただ一人が生きるのは、孤独の極限とも受け取れる。これは愛ゆえの寂しさをあらわした一首だろう。「死ぬ死なぬ」は、生きるか死ぬかという緊迫した心境になってみて、はじめて自分の命を知ったというのである。連作の近辺に「しとしとと月は滴る思ひ倦じ亡骸のごともさまよへる身に」などもあることから、この歌もまた、恋によって「死ぬ死なぬ」という思いであろうことが理解される。「遣るも行かじ死海ならではよし行くも沈みて燃えむ」は、なにかの歌の部分であろうか。正直なにをいっているのかわかりにくい。「行かせるにも行かせられない、干潮でないので、もし行ったなら沈んで燃えるだろう」という。何やら謎めいたことばであるが、この歌のなかの牧水は、ねたみの炎をもやし、嫉妬している。

以上のように、第一歌集『海の声』の中の「死」は、いずれも実際の「死」を詠んだ物はひとつもなく、観念的なもので終わっているが、その背後には『万葉集』についての彼なりの学びがあったと考える。それは他の歌集の歌についてもいえるのであろうか。

続く第二歌集『独り歌へる』（明治四十三年一月一日　八少女会発行）にも実際の「死」が詠まれることはなく、恋情の強調表現としての「死」が詠まれている。

火の山にしばし煙の断えにけりいのち死ぬべくひとのこひしき

この「火の山」は、浅間山であると推測される。「いのち死ぬべくひとのこひしき」は、恋人・園田小枝子を思う表現であるが、万葉集の「朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく恋ひわたるかも（四・五九九）」という笠女郎からの影響を認めることができよう。さらに、

冷笑すいのち死ぬべくここちよく涙ながしてわれ冷笑す

にも今みた万葉集由来の「いのち死ぬべく」という表現が使われている。この冷笑は、憎しみの感情ととれる。

このようにみてくると、牧水の歌の「死」の表現には万葉集由来の恋死から独自に展開させた「死」の表現が広く恋の歌を超えて用いられているということができるであろう。

（四）後期の「恋」と「死」の表現

第一歌集、第二歌集では、世には受け入れられなかった牧水であるが、第三歌集『別離』（明治四十三年四月十日東雲堂発行）でようやく世に受け入れられた。第三歌集『別離』は、第一歌集、第二歌集からそれぞれ数首を削除し、

あらたな歌が入れられる。この第三歌集にも実際の「死」は詠まれていない。つづく第四歌集『路上』は、園田小枝子と別れ、自暴自棄になつていた時期である。歌のなかに砒素を持ち歩く表現がなされたりしているが、これは、明治四十一年二月一日の鈴木財蔵宛書簡に、女性が二十五歳になったら、心中をはかろうと約束していたカップルがあり、牧水は、二人の砒素を持ち歩いていたという行動に憧れをみせていたことなどが思い出される。第五歌集『芸術か死か』では石川啄木の臨終に立ち会い、初めて実際の「死」に基づく歌三首に詠む。さらに、その後は、次第に自然物の「死」という抽象的な表現へ移行しているのである。次の第六歌集『みなかみ』の「死」の十四首は、父の「死」を詠んだものである。ここでは万葉集の「死」の表現から離れた表現をしている。おそらく近代人歌人である牧水も、父の死に直面したとき、現実の「死」の表現を回避できなかったのであろう。そして第七歌集『秋の風』の「死」は十二首である。「死にゆきしわが恋心」「死せる鳥むれつつ空やわたる」「死ぬまじ死ぬまじ」など、これまでの「死」の延長線上にありながら、恋死の要素が薄れつつあると思わせる表現がみえるようになり、ここに牧水の青春の終りが暗示されているかのようである。第八歌集『砂丘』では、友への歌のなかに「死」の表現が一例見えるのみで、もはや「恋死」という表現へのこだわり、未練はなくしたようにみえる。

以降、「恋」はほとんど詠われなくなるが、第十歌集『白梅集』に一例のみ「恋」の歌がみえるものは「東京より相模なる妻の許に」という詞書が付されているものである、旅先から家居の妻を思う歌である。第十二歌集『渓谷集』の「恋」の表現は「吾子の恋しくなれり」という子供への愛情であり、第十四歌集『山桜の歌』の「恋」は「友ぞ恋しき」という結句を持つものと、「友をおもふ歌」と題された十一首のなかの歌（一首の中に「恋」が二回つかわれているもの）である。

また晩年の「死」の表現は、第十三歌集『くろ土』の一首、

死ぬ時し死なせよわれに死ぬばかり酒くらはせよ何も彼も知らず

という歌に、三回「死」が使われている。これは酒で死んだ牧水らしい歌とも言える。またこの第十四歌集『山桜の歌』に見える「死」は、「ありとしも思はれぬ処に五戸十戸ほどの村ありてそれぞれに学校を設け子供たちに物教へたり」という詞書が付けられているなかの歌群の一首?で、

先生のあたまの禿もたふとけれ此処に死なむと教ふるならめ

という歌である。これは、田舎の小学校の軍国主義的教育を揶揄しているような内容にも受け止められる。

後期の牧水の「恋」の表現は、家族愛や友愛のかたちとなってあらわれ、「死」は冗談めいた歌のなかにわずかにあらわれたにすぎない。これは、初期とは歌のテーマが大きく変化したためと見られる。初期の牧水にとって「死」の表現は、いうなれば若い情熱の背景として選らばれた強烈な色彩のようなものであった。その色彩があまりに強烈である故に、青春期をすぎてからのモチーフに「死」に選ぶことがかえって難しくなったものと見られる。そして、また、万葉集の取り入れ方においては、後期は後期のテーマに合わせてまた別の方向へと向ったものと見られる。

おわりに

以上のように、牧水の初期の恋の歌にみられる死の表現に注目するとき、その表現は万葉集の恋の歌にみえる恋情の強調のために用いられる「死」の表現に学んだものであるといえることを確認してきた。牧水の初期歌風の成立に万葉からの影響の存在を言った大悟法利雄氏の直感的意見が正しかったということを以上の考察によって明らかにしえたものと考える。

なお、牧水論としては同時代の他ジャンルの文学作品からの影響についても考察すべきであるが、本稿は、牧水の万葉集からの影響について述べたものであり、同時代の他ジャンルの文学作品からの影響については稿を改めたい。

注

注1　第三歌集の例の中には第一歌集と第二歌集に掲載された歌がかなり重出している。

注2　『恋衣』（与謝野晶子・山川登美子・増田雅子合同歌集）　本郷書院　1905

注3　「万葉集―死と愛―」　中西進　『国文学』　1968

「恋と死」　森淳司　『解釈と鑑賞』　1971

「恋死―万葉集、三代集―」　村瀬憲夫　『和歌山大学教育学部紀要（人文科学）』　1977

「万葉の相聞―「恋死」をめぐって」　森淳司　『万葉集相聞の世界』　1997

注4　『青木生子著作集』第四巻　おうふう　1998

「万葉挽歌論」表1　万葉集における「死」の用例数

部立	雑歌	相聞	挽歌	部立	計
巻別				なし	
一	1				1
二		1			1
三	1		1		2
四		15			15
五	4				4
九	2	1			3
十		1			1
十一		25			25
十二		16			16
十三		1	1		2
十四		2			2
十五				7	7
十六	9				9
十七				3	3
十八				2	2
計	17	62	2	12	93

注5　『若山牧水全集』第十二巻　日本図書センター　1982

※明治四十二年二月五日の若山牧水より石井貞宛の書簡になかに万葉集を讃美する牧水の言葉が次のように残されている。

「さっきから万葉を読んでゐますが、ようござんすねえ、まるで大空を悠々として雲のゆくやうな豊かな詠みぶり、まつたく言語道断です」

注６　「古代和歌における心物対応構造―万葉から平安和歌へ―」　鈴木日出男　「国語と国文学」　１９７０

（たなかのりこ・同志社女子大学研究生・近畿大学非常勤講師）